

ハンドボール界の諸問題と今後の方向性に関する研究—歴史的背景をてがかりとして

A study on the problems of Handball and its development and future —Learning from its history—

1K05B167

夏山 陽平

指導教員

主査 石井昌幸先生

副査 磯繁雄先生

はじめに

本研究ではハンドボールがどのようにしてヨーロッパで誕生し、どのように発展して日本に伝わって来たのかを明らかにしていきたい。また日本のハンドボールはマイナースポーツである。そこでメジャースポーツにするためにはどうすべきかを日本ハンドボールの歴史を明らかにして述べる。また近年、日本ハンドボール代表が世界への道を閉ざされている背景には中東諸国の裏工作も関係している。

このようにハンドボール界で問題となっている、中東諸国(特にクウェート)のハンドボールの歴史や問題点を明らかにする。

第一章 ハンドボールの誕生

11人制ハンドボールが発祥したのはドイツで、7人制が発祥したのはデンマークである。この2つの国の歴史を見るとともにヨーロッパでの発展、そしてIHF(国際ハンドボール連盟)の誕生の流れを説明する。

ボールを手で扱う記録が残っているのは、今から約4000年前のエジプトの壁画に描かれているものである。その後の時代にも「パルパスツム」、「カルシオ」等の手を使って行う遊びがあった。19世紀後半ドイツにて、女性のためのボールゲームとして「ラフバル」、「トーアバル」が誕生する。これら二つの遊びをカール・シュレンツが改良して、競技規則を作り、11人制ハンドボールが誕生した。近隣諸国への普及も進み、競技規則も改正された。しかし、北欧諸国では冬季に11人制ハンドボールを行うことが困難なため、デンマーク人のフレ

ディク・クヌッセンによって7人制ハンドボールが誕生した。第二次世界大戦を経て世界のハンドボールはより、スピーディーで迫力のある7人制ハンドボールが主体となっていく。

第二章 日本ハンドボール界の歴史と発展

日本に11人制ハンドボールを伝えたのは大谷武一氏である。当時、文部省も送球の体育的効果が大きいことに着眼し、さっそく中学校・高等女学校の体操教授要目の中にとり入れた。学生層中心に普及が進み、国民体育大会で開催されるようになってから、一般の部にも普及していった。

現在の日本ハンドボールの最高峰が「日本ハンドボールリーグ」である。このリーグはプロリーグではなく、選手は社員として会社業とハンドボールを平行しながらプレーしている選手が多く、いわゆる実業団チームである。このリーグの現状と課題を知り、マイナースポーツとしての位置づけのハンドボールをメジャーにするための解決策を述べる。

第三章 中東の笛、アジアハンドボール界の闇

競技スポーツにおいて「審判」の存在はどのスポーツにおいても勝敗を決するのに重要なものとなっている。しかし、今アジアハンドボール界では中東諸国のチームに有利な試合展開にするために、審判が故意に不利益なジャッジを繰り返し、中東諸国に勝たせている現状がある。この中東諸国への有利な審判のジャッジの事を「中東の笛」と呼ぶ。アジアハンドボールの歴史を知るとともに、中東の笛の現状、解決策、国際ハンドボー

ル連盟との繋がりについて述べる。

終わりに

現在日本のハンドボール界は重要な局面を迎えている。マイナースポーツの категорияに含まれていたが、オリンピック再予選等の影響もあり、今年度とても注目されて、メディアでの報道も世間の認知度も日本ハンドボールリーグを始めとする

各種大会の観客動員数は前年比をはるかに超えている。これらのことからやはり、ハンドボールがメジャースポーツに変わるためには今がターニングポイントといっても過言ではないだろう。メジャースポーツになるためには、「メディア」と「幼少期における競技人口の獲得」が最も必要なことであろう。